

平成31年3月31日(日)

老球の細道472号

### 3月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今は昔、3月は別れの季節だった。卒業する生徒との別れ、転勤する先生との別れ、色々な別れを経験したが、高齢期になった今は永遠の別れが多くなってきた。会うは別れの始まりなりと言われるが、人生別れは宿命である。別れ、終わりを覚悟するところに今あるこの生を大切にすることができるのかも。

#### 1・トイレでふと思う

◆「生は偶然 死は必然 不幸は突然 幸福は自然 人生苦楽 四季折々 陽はまた昇る」  
〈室井富仁〉

中国宋の時代の諺にアイデアの生まれる場所「三上」というのがある。「馬上、枕(ちん)上、厠(しん)上」。私もそれにちなんで、車、トイレ、ベッドの上にはいつもペンと大きめのポストイットを配備しておく。ある日トイレで、便意と不幸は突然やってくるころから思いついた。普段気がつかない幸福も大切にしなければならないことも。

#### 2・テレビから

◆「苦虫をつぶした顔をして酒を造ったって、麴が見ていますよ、麴菌がみえていますよ。楽しく造らないと楽しく飲める酒にはならない。心の余裕が味に出る」〈NHK『プロフェッショナル仕事の流儀』由利本荘・伝説の杜氏〉

ものづくり、人づくりには作る人の人間性が現われる。何事も「心をこめて」。選手を大好きになり、大事に育てた選手は「ピグマリオン効果」でコーチの願った選手に育つ。コーチの期待、希望はいつの日か必ず選手に伝わる。至誠天に通ず。

#### 3・新聞、雑誌のコラム等から

◆「今思うのは、小さいことを重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道だと感じている」〈朝日・イチローの主な発言から〉

その道の天才は皆同じようなことを言う。当たり前のことをちゃんと続けることが、何でも一番大事なこと、特別なことはなにもない。「神は細部に宿る」。

◆「生きる、ということは誰かの記憶に残ることでしょうか？」〈朝日・語る・姜尚中〉

「随所に主となる」と肩肘張って生きてきたが、随所で生きて証しを残せてきたのだからかと、今になって反省することしきりである。今は只孫達の記憶に残るような生き方で締めくりたいと思う毎日である。お爺さんの「大きな古時計♪」のように。

◆「マララにはどんな特別なことをしたのかと人々に聞かれるが、私は彼女に教育を与え、翼を切らなかつただけだ」〈朝日・ノーベル平和賞受賞者・マララさんの父〉

パキスタンで女子教育の権利を訴えてきたマララさんの父親は、女子教育を禁じるイスラム武装勢力に反対の声を上げたが、マララさんは銃撃を受けた。マララさんは幼い時から、自分が信じることを言い、行動する子どもだったようだ。我孫にもそうなってほしい。

◆「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」〈朝日・折々のことば・宮沢賢治〉

会津地区のどこかのチームだけが強くなってもそのチームだけしか喜ばない。地区全体のレベルが上がってこそ、そこから抜き出したチームを皆が応援する。